

The Newsletter

HOSEI I.J.S.

No.1 Sep.2005.



2005年3月7日「日中の文化関係を考える(その2)」シンポジウム

CONTENTS

巻頭挨拶	2
全体活動紹介	3
研究会報告	5
研究チーム活動報告	8
COEタスクフォース	8
学術フロンティア	10
2005年度 国際日本学 研究者一覧	12
活動の足取り/今後の活動計画	12

「日本発信の国際日本学の構築」に向けて



21世紀COEプログラム拠点リーダー
国際日本学研究所所長・文学部教授
星野 勉

「日本発信の国際日本学の構築」と耳にして、「ハテナ？」と思われる方は多いのではないでしょうか。確かに首をかしげたくなるようなタイトルですよね。「日本学」自体が外国人の日本に寄せる一種のエキゾティズムに由来する言葉であると言ってよい面がありますし、もともと少数のマニアのものであった特殊な「日本学」なるものに「国際(的)」という普遍的な意味合いをもつ形容詞を付けて、それをほかでもない日本から発信しようと言うのですから、奇異な感をもたれるのは当然といえば当然です。じっさい、外国の日本学、日本研究は、それぞれの国やその時代背景に応じて、また、研究者の個人的な関心・思惑に応じて多種多様ですから、そうした雑多なものを「国際日本学」の名のもとに一縷めにしようとすること自体が途方もないことですし、無謀な企てであると言えます。

私たちがこの21世紀COEプログラムに着手してほぼ3年になりますが、この3年間はこのような目論みの途方もなさ、無謀さを思い知らされる日々であったと言っても過言ではありません。しかし、同時にまた、一見途方もなく無謀に見える試みの必要性を改めて認識させられる毎日でもありました。私たちの当初の目論みは間違ってはいなかったのです。

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ともて囃された頃ほどではありませんが、依然として外国から日本や日本文化に寄せられる関心は衰えを見せていません。私たちは、そうした外国人の眼差しのなかに、日本や日本文化の思いがけない側面を発見し、これまでとは違った自分自身に気づかされることもあります。しかし、その眼差しが、例えば、アニメ、マンガにだけ向けられて、こちらがもっと目を向けて欲しいと思うことからずれていったり、誤解や偏見で畳っていたりということも、しばしば見受けられます。

それでは、国内の研究者は、日本や日本文化を理解しようとする外国人の熱い眼差しに応え、それに手を差し伸べる努力をしてきたでしょうか。残念ながら、否であると言わざるをえません。「日本文化は日本人にしか分からない。だから、外国人の日本研究から学ぶべきものはない」という口吻に端的に言い表されていますように、わが国の日本文化研究は、どちらかと言えば方法論的な意識が稀薄で、しかも内向きの志向が強く、それゆえ、外国人にとって必ずしも開かれたものとなっていました。しかし、ここに國の内外に開かれた「日本発信の国際日本学」の構築が必要とされる理由があるのです。

「国際日本学」を構築するにあたり、私たちは「自文化」をあえて「異文化」視するというスタンスをとります。外国の研究者が日本の文化を研究する場合、当然それを「異文化」として取り上げますが、こうした外国の研究者の外からの視点を取り入れることによって、私たち自身の内からの視点を相対化し、自文化研究が陥りがちな狭隘さからの脱却をはかるわけです。さらに、私たちは、外国の研究者の外からの視点を私たち自身の内からの視点と摺り合わせ、内と外の視点の差異、日本文化という同一対象についての内と外からの理解内容の差異を際立たせながら、この差異の意味をそれぞれの視点や文化理解の背景にまで目を配りながら明らかにすることに向かいます。それは、日本文化に関する内と外との開かれた「学問的な対話」が成立する条件を解明し、内外の日本研究者が相互に対話し合う共通の場を設えるためにはなりません。

「異文化」視という観点から日本文化を眺め直してみると、安易に「日本」というかたちでひと括りすることを許さない、国境を越えた拡がりや歴史的な積み重なりのうちに、日本文化が多様な相貌を呈していくことに驚かされます。私たちは、日本は单一の民族からなる文化的にも均一な社会であるというこれまでの見方を採用しません。私たちは、アジア近隣諸国の文化、さらには世界の国々の多様な文化との接触・交流・変容のなかで形成されてきた日本文化の国際性に着目します。同時にまた、歴史的に幾重にも積み重なった層を成す日本文化の重層性にも注目します。そのさい、辺境の文化、とりわけ、これまで日本のなかの「異文化」とされてきた琉球・沖縄および蝦夷・アイヌの文化にも目を向けます。私たちは、日本の中の「異文化」とされてきたもののうちに日本文化の基層を探るという冒険に挑戦しようというのです。

現在、私たちは、国際シンポジウム、研究集会などを通じて、内外の研究者とともに研究活動を展開しつつあります。その研究成果を、『国際日本学』、『国際日本学研究所研究報告』、『国際日本学研究紀要』、『国際日本学研究叢書』などの出版物によって世に問っています。さらにまた、研究情報の交換、学問的な対話のために、内外の研究機関・研究者との交流・連携のネットワークの形成を推進しています。

最後に、21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」という私たちの挑戦的な取り組みに期待を込めた暖かい眼差しを向けてくださいよう、お願い申し上げます。

1. 21世紀COEプログラムとは？

文部科学省「21世紀COEプログラム」は、「第三者評価に基づく競争原理により競争的環境を一層醸成し、我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点(Center of Excellence)を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進すること」を目的に、「大学の構造改革」政策の一環として打ち出されました。

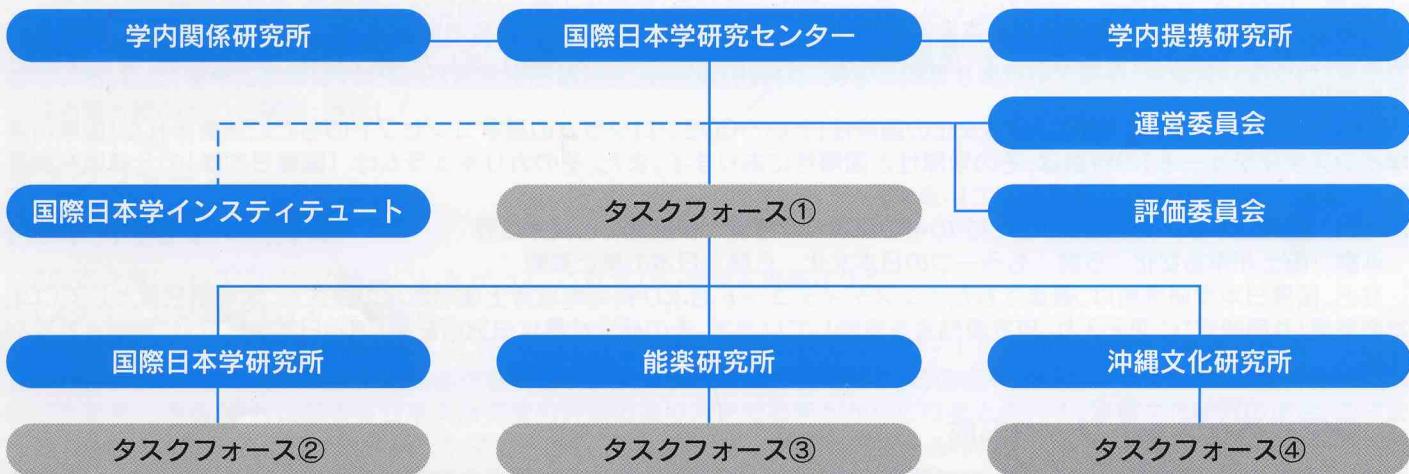
平成14年度採択21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」は、本学を中心とする国内外の研究者が、「国際日本学研究所」「野上記念能楽研究所」「沖縄文化研究所」などの研究機関を中心に、教育機関である大学院「国際日本学インスティテュート」とも緊密に連携しながら、事業を推進しています。そして、この事業の全体を国際日本学研究センターが統括しています。

2. 学術フロンティア推進事業とは？

学術フロンティア推進事業は、文部科学省がわが国高等教育機関の大きな部分を占める私立大学等における研究基盤の整備および研究機能の高度化を図るために「私立大学学術研究高度化推進事業」として行う支援事業のひとつであり、私立大学の大学院・研究所の中から、優れた研究実績を上げ、将来の研究発展が期待される卓越した組織を「学術フロンティア推進拠点」に選定し、研究施設・設備、研究費、研究スタッフについて、総合的かつ重点的に支援するものです。

平成14年度採択「私立大学学術研究高度化推進事業(学術フロンティア部門)」プログラム「日本学の総合的研究」は、「国際日本学研究所」を推進母体として、COE事業展開と相互に補完し合いながら、推進されています。

3. COE推進事業全体の組織図



4. COE推進事業各タスクフォースの活動内容の概要

中間評価の結果を受け、当初の計画を修正し、8つのタスクフォースから4つのタスクフォースへの絞り込みを行いました。これは、具体的な成果が見込める領域に集中することによって、COE事業をより実効的に推進するための措置です。

これにともない、昨年度の途中で、拠点リーダーの交代、事業推進担当者の部分的な交代を実施しました。

・タスクフォース①：課題：国際日本学の理論構築とタスクフォース間の連携

* 国際日本学研究センター担当

1) メタサイエンス(方法論)の確立、国際日本学の理論的構築に向けての研究推進。

2) センター運営委員会、研究所運営委員会、事業推進担当者会議の効果的な運用による各タスクフォース間の連携の強化。

・タスクフォース②：課題：中国の日本文化研究の総合的研究

* 国際日本学研究所担当

1) 外国の日本文化研究(当面は独・仏・中に限定)の分析・評価の並行的な推進。

2) シンポジウムなどの開催、成果の刊行を通じて、日本認識の差異(ずれ)の究明と相互的な対話の成立する条件の解明。

3) 英米語圏の日本文化研究の批判的検討、その成果の非英語圏日本文化研究の評価への活用。

・タスクフォース③：課題：世界の中の能楽

* 野上記念能楽研究所担当。

1) 外国の能楽研究の分析・評価(メタサイエンスの適用)の推進。

「謡曲の翻訳・研究」「音楽・身体・面装束」という二つのテーマを設け、外国における当該研究論文の収集・分析・分類・評価を行う。

2) 外国の研究機関・研究者との連携による共同研究や研究協力。

3) グローバルな文化遺産という観点による能楽研究。

全体活動紹介

4)貴重資料と研究成果のデジタル化による公開・発信。

・タスクフォース④：課題：国際沖縄学の構築

*沖縄文化研究所担当。

1)琉球・沖縄の基層文化形成に関する調査・研究、ならびに、文化的アイデンティティの形成に関する調査・研究。

2)沖縄とヤマトの沖縄研究の相互評価を踏まえた上で、それと諸外国の沖縄研究との相互評価を積み重ねる。

3)国際日本学構築のための戦略的拠点としての国際沖縄学の構築。

琉球・沖縄文化の具体相の究明を通じて、一地域研究を超えた一般理論を提示する。

5. 学術フロンティア推進事業各テーマプロジェクトの概要

「国際日本学研究所」を推進母体として、COE事業展開とは相互に補完し合うかたちで、「日本学の総合的研究」を推進します。研究事業全体は六つのテーマプロジェクト・チームによって担われています。

- ・テーマプロジェクト①：外国の日本学研究事情
- ・テーマプロジェクト②：アジアの中の日本学
- ・テーマプロジェクト③：古典文化と民衆文化
- ・テーマプロジェクト④：風土が作る文化
- ・テーマプロジェクト⑤：日本の中の異文化
- ・ワーキングプロジェクト：成果の情報化と活用

6. COE教育拠点形成

既存の拠点専攻(人文科学研究科日本史学専攻、同日本文学専攻、政治学研究科政治学専攻、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所)に加え、独自の教育拠点として「国際日本学インスティテュート」を開設しました(修士課程03年度開設、博士課程05年度開設)。

「異文化研究としての日本学」、「日本文化の国際性」というCOEプログラムの基本コンセプトのもとに設置された「国際日本学インスティテュート」の特徴は、その学際性と国際性にあります。また、そのカリキュラムは、「国際日本学」の全領域を網羅するために、次の六群を柱に編成されています。

1群：国際日本学 2群：アジアの中の日本 3群：伝統文化と民衆世界
4群：風土が作る文化 5群：もう一つの日本文化 6群：日本の美と芸能

なお、国際日本学研究所は、選抜されたインスティテュートおよび拠点専攻博士後期課程の院生を、学術研究員としてCOE推進事業(共同研究)に迎え入れ、研究奨励金を支給しています。その研究成果は研究所紀要『国際日本学研究』に掲載されています。

7. 研究成果とネットワーク形成

現在、私たちは、国際シンポジウム、研究集会などを通じて、内外の研究者とともに研究活動を展開しつつありますが、その研究成果を、『国際日本学』『国際日本学研究所研究報告』、『国際日本学研究紀要』、『国際日本学研究叢書』などの出版物によって世に問っています。しかし、活字媒体によってだけではなく、CD-ROM形式ないしはネットワーク上でも公表するように努めています。そして、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所、国際日本学研究所の資産のデジタル化に合わせて、順次ネットワーク配信(=公開)する作業も進めています。さらにまた、研究情報の交換、学問的な対話のために、内外の研究機関・研究者との交流・連携のためのネットワーク形成を推進しています。

『異文化としての日本—国際日本学の可能性』

青木 保

国際的な研究環境において日本を対象とする研究がいかなる状況にあるのか。日本の内外における研究の同行に注目し、その傾向を把握し、その成果を分析検討する。そして、来るべき研究の可能性を指し示す。これが国際日本学に対する基本的な要請であろう。

「異文化としての日本」を研究対象とする国際的な研究は数多あるが、ここでは戦後の国際研究環境に現れた日本研究の中で、研究の性格を端的に表すと思える三つの研究を取り上げて「異文化としての日本」がいかに位置づけられているか、考えてみたい。

1. 全体論的視点による研究

このアプローチによる研究の嚆矢は、依然として戦後いち早く日本文化研究として紹介された、アメリカの人類学者ルース・ベネディクトの「菊と刀」(1946年出版、48年邦訳)であろう。戦時下において戦争相手の敵国研究として始められた研究を基にしているが、当時、アメリカにおいて文化人類学を中心として社会に対しても影響を持ち始めた「文化相対主義」的観点に立つこの研究は、日本の専門研究者による批判を受けながらも、その斬新なアプローチによって今日まで読み継がれる日本研究の基礎文献の一つとなっている。全体としての日本人と日本文化・社会の特徴を「集団主義」「恥の文化」に見出し、西欧の「個人主義」「罪の文化」と対比させるこの研究は、いわゆる「日本文化論」の基礎理念(批判的であっても)を提供するなど大きな影響力を持ち、「異文化としての日本」を捉えるための有力なモデルとなつた。川島武宣や丸山眞男などによる肯定的評価もあった。

2. 「事例研究」

ある特定の問題に関して日本をひとつの事例として検証しようとする。方法論としての理念枠組みを適用して分析する。その典型的な成功例は、ロバート・ペラー「日本近代化と宗教倫理」(1956年出版、61年邦訳)であろう。ウエーバー/パーソンズの社会学的な理論枠組みを近代日本の「合理化」過程の分析に用いた野心的な研究であるが、まれに見る完成度に達している。著者は、ベネディクトと同じく「日本研究者」ではない。あくまでも日本を「事例」として扱って、それを広い社会学的枠組みの中に位置づけようと試みた。ペラーは日本の次はトルコの研究をしている。日本の近代化を導き出した「宗教倫理」を石田梅巌の石門心学に求め、そこから経済と社会・文化の相関関係による分析を試みた本書は、理論と事例分析のまれな整合性を持つ研究である。この点で本作を超える研究は、その後出ていないといつても過言にはならないのではないか。

3. 「普遍的課題」としての日本研究

現代日本史の専門研究者による本格的な研究である。ジョン・ダワー「敗戦を抱きしめて」(1999年出版、2001年邦訳)の特色は敗戦を迎えた日本人がいかにそれを受け止めたか、さまざまな立場とレベルの証言を集め、そこに歴史の刻印を示すが、「日本」「日本人」という単一の存在、集合的表象を求める。個々人の受け止めた敗戦を通して浮かび上るのは、日本の敗戦という固有の現象の中に時代と人間の「普遍的」な経験である。著者は、日本や日本人は存在せず、複数の日本・日本人が存在するだけであると指摘している。1と2の場合と違い、日本現代史の専門研究者による詳細なモノグラフ研究でありながら、そこに示されるのは「敗戦経験」という普遍的な主題であり、いわば「地域研究」の固有性を踏まえての「普遍性」の抽出という理想的な研究成果が提出されている。

以上、「異文化としての日本」という観点から戦後に現れた国際的な日本研究の中から、三つの代表例を取り上げて、その特色を概観した。いずれも優れた研究であり、1は研究視点(文化相対主義と文化人類学的な文化分析)、2は方法論(社会学的理論枠組みの適用と近代化・合理化モデル)、3は特殊から普遍へ(専門的歴史研究と普遍的課題「例外ではない日本」)、という形で「日本研究」のモデルとなりうる研究であり、他の地域の研究(ヨーロッパやアメリカも含む)にとってもモデルとなる研究例である。その点で「国際日本学」研究のあり方に関して示唆するところが多いと思われる。ベネディクトの研究にしても、90年代に入つてクリフォード・ギアツが「われわれとはまったく違った文化のことだと思って読んでいるうちに、読み終わってみれば違っているのはむしろわれわれのほうだと気づく」というような感想を記しているように、アメリカ人から見ても「異文化を通して自文化」の認識を得させる作用をもつ。研究視点や方法論を異にすれば、ここに示したような研究成果の例は、「異文化としての日本」あるいは「文化を異にする研究者による日本研究」によって可能になった研究であり、ダワーの研究に対して日本で「日本人がすべき研究であった」との評が出されたのを見てもわかるように、「異文化」という視点が逆に国内の研究者の気づかない研究課題とその方法論的アプローチを可能にする「利点」を有することがある。このこと自体の究明は「国際日本学」にとっての研究課題であろう。「異文化としての日本」また「自文化としての日本」、そしてその「総合化」に、「国際日本学」研究の大きな課題の一つがある、と筆者は考える。

「国際日本学」は、国内の日本研究と国外のそれとの関連性の追求と両者の間の有意味的な媒介を行い、「日本研究」の向上と発展を期すことに課題がある。それはきわめて具体的な個々の研究の専門的な検討や研究課題の展開であるとともに、「異文化研究」「自文化研究」の限界の指摘から、「固有性を通しての普遍性」という視点を明確にすることを目指すところに学的使命がある。

日本文化研究の方法論をめぐる考察 一異文化間の対話の可能性をめぐって一

星野 勉

一 問題の所在

普遍的な欧米類型モデルの欠如態としての異質で特殊な日本文化という、これまでの日本文化特殊性論の基礎にあるステレオタイプな発想は批判されるべきである。そこには、近代欧米類型を普遍的なものとして理想化する傾向と、近代欧米的な尺度・方法論を万能視する傾向が認められるからである。これには文化相対主義が対置されなくてはならない。しかし、この文化的相対主義が徹底されると文化的アイデンティティの問題と抵触する。そこで、対話という観点から異文化理解の問題が立てられる必要性が出て来る。それでは、異文化間の対話を成立させる条件は何であろうか。その条件の解明は国際日本学の方法論の構築にも繋がるはずである。

二 異文化との出会い——翻訳文化を考える——

翻訳における意味の変容を二つの側面から考察することができる。一つはもとのコトバ(原語と翻訳語)がもっていた意味の喪失であり、もう一つは翻訳された側の言語内での新しい意味の創出である。「自然主義」という翻訳語を例に挙げれば、元来人為的にあえて意識したり行為したりしないはずの意味をもつ「自然」が、「主義」とされることによって、あえて「自然のままに」自然を対象化する(人為を加える)という矛盾した意味が生まれ、心境小説・私小説という独特のジャンルが生み出された。つまり、翻訳とは、Aという言語・文化の一要素を、たんにBというもう一つの言語・文化の中に移行する(伝達する)ということではなくて、意味の変容を通じてAの中にもBの中にもなかつた言語・文化を、Bの言語・文化の中に創出することである。

また、翻訳における異文化との出会いは三つの段階を通じて遂行される。すなわち、意味不明なところを不明なままに受容(文化の受容)、意味の漸次的な理解(=意味の変容)、新しい意味の創出(=文化の創出)である。こう考えると、翻訳も文化の形成という点からきわめて重要であることが理解されよう。

三 翻訳不可能性と伝統

翻訳における意味の変容とは、また見方を変えれば、意味のすりかえでもある。この意味のすりかえの根底に働いているのが言語的・文化的な枠組み(framework)、もしくは、伝統にほかならず、これが文化の特殊性をかたちづくる。しかし、こうした枠組みにせよ、伝統にせよ、変わらざる側面と変わる側面とがあることに注目する必要がある。

四 異文化間の対話の可能性を探る

1) 地平の拡大——K・ポパー——

自分の文化の地平から抜け出ることはできない。しかし、異文化の刺激によって自分の文化地平を見直し、それを拡大することはできるはずだ。

2) 翻訳の主体=乗継する主体——酒井直樹——

「翻訳の主体」は「異言語的な聞き手」への語りかけの構えを取ることによって、異なる言語・文化間を乗り継ぎする。翻訳とは、本来非連続性において連続性を創り出す実践にほかならず、非共約性の場面で関係を制作する社会的実践である。

3) デカレ(decaler): ずらす、くさびを外す——F・ジュリアン——

デカレとは、1)習慣的となっている思考の枠組みから位置をずらし、別の枠組みに身を委ねること、2)習慣的となっている思考の枠組みを固定しているくさびを抜くこと、すなわち、それをいったん解体し、その思考の枠組みのなかでは思考することのできなかつたものを視野のうちに取り込むことである。このデカレによって、異なった文化・思想を相互に映し出し、それぞれの文化・思想を動搖させ、これまで自明とし問うことをしなかつたものを問い合わせ直す「問い合わせの力」を回復することができる。

「アジアの中の日本学」構築のために必要ないいくつかの視角について

飯田 泰三

この発表は、思想、政治学を含む社会科学の領域で、戦後日本の指導的役割を果たした丸山眞男の日本文化論を手がかりに、「アジアの中の日本学」構築のために必要ないいくつかの視角について考察したものである。

丸山眞男は、西欧の発展モデルを模範とする近代主義者と称されることが多いが、彼には一元的な発展論に対して複線的な発展論という発想があり、この点を見逃すと彼の思想の拡がりと奥行きとをとらえ難うことになる。

この複線的な発展論という観点のもとに展開される文化接触論、古層論は、「アジア学の中の日本学」構築のために必要ないいくつかの視角を我々に示唆している。

文化接触論とは、文化形成を異文化との接触による文化変容のなかでとらえ返すものである。丸山によれば、日本の中国文明の受容は、距離的に「近すぎず、遠すぎず」が幸いして、選択的受容が可能な「雨漏り型」(「洪水型」の対概念)であった。

また、丸山は、文化を多層的なものと考える。その文化成層論によれば、文化は一般に、抽象的理論・学説、思想・観念、ムード・雰囲気、モーレス(習俗)の四層からなる。そのうち、古層とは、いわば執拗低音であり、外から受容する文化を修正、変容する何ものかである。そのような文化成層論、古層論は、たとえば、天孫降臨説とニライカナイ、オナリ神の神話に具体例を拾うことができる。水平軸としてのニライカナイが縄文の文化層を、垂直軸としてのオポツカグラ、天孫降臨説、出雲神話などが弥生の文化層を形成する。

さらに丸山によって展開される、天皇制と古層論の問題、伝統の多義性(パターンとしての伝統・価値的なコミットメントに媒介された伝統・土着的な文化としての伝統、あるいは、Pre伝統・Domi伝統・Mu伝統)、伝統と革新の関係構造、さらに「アジア」、「東洋」という名称のとらえ直しなどは、「アジアの中の日本学」構築のために必要な視角について考える上で、きわめて示唆的である。

Singapore Workshop on a Japanese Performing Arts Resource Centerに参加して スティーヴン・G・ネルソン(文学部教授)

COEプログラムのタスクフォース③「世界の中の能楽」は、外国の研究機関や優れた研究者との連携、および能楽関係資料と研究成果のデジタル化による発信という目的を掲げている。この目的を達成するため、法政大学の野上記念能楽研究所(以下「能研」)は米国ニューヨーク州のコーネル大学との共同研究プロジェクトを進めている。

現在、コーネル大学が中心となってGlobal Performing Arts Consortium(世界舞台芸能コンソーシアム、略してGloPAC、グローパック)が、世界各地の大学、演劇博物館や芸能団体の協力を得て活動を開始している。グローパックの概要については、ホームページ(<http://www.glopac.org>)掲載の日本文を引用すると、「GloPACは国際的な団体・個人組織であり、舞台芸術の研究と保護を目的に、革新的なデジタルテクノロジーを使って、マルチメディア、他言語に対応した容易に利用できる情報資源の作成に取り組んでいる」とのことである。主な事業には次の3つがある。

1. Global Performing Arts Database(略してGloPAD、グローパッド) 世界中の舞台芸術に関連したデジタル画像、テキスト、ビデオクリップ、録音や3D画像のような複雑なメディアオブジェクトを納める、他言語利用とウェブアクセスが可能なデータベース。
2. Performing Arts Resource Centers(略してPARC、パーク) データベースのコンテンツを活用したインターакティブな教育・研究モジュール。学術的な研究成果に立脚しつつ最新のデジタル技術を採用する。
3. Performing Arts Electronic Journal(略してPAEJ、ページ) 演劇・芸能に関する学術的な研究成果を、最も適したマルチメディア媒体で発表できる電子ジャーナル。

今回の会議(シンガポール・ワークショップ－日本の舞台芸術リソースセンターについて)は、GloPACの参加大学の1つ、シンガポール国立大学で6月24～26日に開かれた。参加者は17名(米国7、日本4、ロシア1、マレーシア1、シンガポール4)の小規模なワークショップで、日本の舞台芸術に関するリソースセンター(J-PARC)開発の可能性を探るのが主な目的だった。筆者は、法政の能研を代表しての参加だった。3日間にわたるワークショップで計7つのセッションが開かれ、大変充実した議論が行なわれた。ワークショップの全容はウェブで公開されている(http://www.glopac.org/Jparc/Sing_workshop/Sing_agenda.htm)、内容を簡単に紹介すると次の通り。

- ・歓迎セッション：歓迎挨拶の後、グローパックの主な推進力となっている、コーネル大学大学院教授のカレン・プラゼル氏による趣旨説明。次いで、コーネル大学での実務担当者から、データベース構築および利用に関する技術関連の説明。
- ・第1セッション「デジタル技術とツール」：他の演劇関係機関の優れたホームページの紹介、最新のデジタル技術と更なる技術開発の可能性。
- ・第2セッション「特殊コレクション」：関連資料の所在、利用の利便性、J-PARCでの活用の可能性。筆者はここで能研の所蔵資料(文献資料・画像資料)について報告。
- ・第3セッション「国際的なリソースとニーズ」：国際環境における日本舞台芸術関係資料の供給と需要の現状。資料入手・利用の方法、著作権・版権の問題など。
- ・第4セッション「教育・研究モジュール」：J-PARCのための教育・研究モジュールの具体案。
- ・第5セッション「技術訓練ワークショップ」：データベース編集インターフェースの入力方法、個々の記録のメタデータ作成の指針など。参加者が帰国してからオンラインで編集作業を行なえるよう訓練を受ける。
- ・第6セッション「意見交換－将来に向けて－」：総括と今後の計画。

なお、このワークショップは全面的に国際交流基金の援助を受けて実現したものであり、同基金が筆者の諸経費を負担してくださったことに対しここに記して感謝の意を表したい。

●COEタスクフォース

タスクフォース①

国際日本学の理論構築とタスクフォース間の連携

星野 勉

このタスクフォースの課題は、具体的な研究活動を踏まえて、国際日本学とはどういうものであるかについて、その全体像を理論的に提示すると同時に、国際日本学の方法論を確立することにある。

この課題の達成に向けて、私たちは、内と外の視点を交差させることを通じて、日本文化に関する「国内外の学問的な対話」が成立する条件を究明することに着手している。その狙いは、一つには私たちの自文化研究が陥りがちな狭隘さから脱却をはかることであり、もう一つには日本文化について国内外の研究者が対話する場を確保することである。

具体的には、定例研究会を下記の通り開催した。内容の詳細は、研究会報告にある通りである。これをうけ、その成果を『国際日本学の構築とメタサイエンス』(仮題)に纏める(第2四半期)予定である。

6月1日 青木保「〈異文化〉としての日本」

6月29日 星野勉「日本文化研究の方法論をめぐる考察」

7月21日 飯田泰三「〈アジアの中の日本学〉構築のために必要ないつかの視角について」

私たちは、国外の日本研究の研究というメタレベルの研究を推進するにあたって、次の研究手順を提唱しているが、それは各タスクフォースの具体的研究において生かされ、例えば、中国での日本研究の研究で一定の成果を挙げている。

〈メタレベルの研究の手順〉

1. 第一次準備(研究クラスターの選定)

(1) 外国における日本文化研究の動向を複数のデータ・ベースを用いて調査する。

(2) 時間軸と空間軸とを噛み合わせ、研究クラスターを日本文化研究の点数、研究動向などを手がかりに選定する。

2. 第二次準備

(1) 選定された研究クラスターにおける代表的な研究成果を取り纏める。

(2) 第一次評価の資料となる報告書を作成する。

3. 第一次評価

(1) 上記報告書に基づいて、クラスターの属する国の日本文化研究者と日本の研究者とによる第一次評価シンポジウムを開催し、クラスターの特性を探究する。

(2) 第一次評価シンポジウムをうけ、第一次評価報告書を作成する。

4. 第二次評価

(1) 第一次評価報告書に基づいて、内外の日本文化の研究者の参加のもとに、第二次評価シンポジウムを開催し、日本文化研究のメタレベルの分析・評価(=国際的な比較研究)を執り行う。

(2) 第二次評価シンポジウムをうけ、第二次評価報告書(研究叢書)を作成する。

月一回定期的に、事業推進担当者会議、国際日本学研究センター運営委員会、国際日本学研究所運営委員会を合同した拡大運営委員会を開催し、問題意識の共有、各タスクフォース間の連携強化をはかっている。

タスクフォース②

中国の日本文化研究の総合的研究

王 敏

日中ほど歴史的に長く交流してきた両国関係はないと思われるにもかかわらず、現代史における反目、ひがみあいはどうしたことか。ねじれ現象がおこりやすい。これを克服するには、両国を異文化という視点で捉え直す文化関係の確認、分析、研究が重要と考えている。アジアの国々の間にも共通する視点と思われる。

文化関係に重心を移して見れば、長い伝統がある両国は独自の文化を育んできた。価値観、宗教、文学、思想などに異なる発展をしてきた。日中関係の基礎として文化関係への注意を払えば、相互に文化の異質を発見し、思考パターンの違いを認め合うようになるはずである。文化交流の促進が不可欠のはずである。等身大の対話が情態になれば、政治的な反目も少なくなるであろう。両国研究者の共同作業によって文化関係の研究を進めることができることが急務と思う理由である。

2004年10月4日に、同研究の意味を国際シンポジウム「日中の文化関係を考える—相互認識の「ずれ」を中心に—」の開催を通して探ってみた。さらに、シンポの第2部として、中国に会場を移して10月30、31日に北京で、同趣旨のワークショップを中国現代国際関係研究院との共催で開催した。この二つのシンポ開催を通して、日中両国の関係者は一つの認識を確かめ合った。相互認識のずれが「日中の文化関係を考える」キーワードになりうるだろうということだった。

2005年3月7日、「日中の文化関係を考える」シンポジウム・パート2を開催した。第2ステージにランクアップできたという認識に立って、シンポジウムパート3として、2005年10月12日に「東アジア共同体の構築に向けて——文化交流とナショナリズムの交錯」の開催へ準備を進めている。2006年2月には以上三回にわたるシンポジウムの成果報告とこれまで二回にわたって開かれたシンポジウムの研究発表を加え、研究叢書の一冊として纏められるよう、努力する次第である。

タスクフォース③ 世界の中の能楽

中山 玲子

タスクフォース③では、2006年秋に予定しているシンポジウムに照準を合わせ、いくつかの活動を並行して行っている。まず、本年度4月から、謡曲の英訳を比較する演習を開始した。謡曲の翻訳についての研究は、シンポジウムの大きな柱の一つである。演習は、国際日本学インスティテュートの授業として行っているが、国際文化学部の竹内晶子講師や日本文学科のS.ネルソン教授も常時参加し、指導にあたってくれている。他に、実際に謡曲の翻訳を経験している外国人研究者に随時参加してもらう予定で、すでにピッツバーグ大学のスマサースト教授には3回連続で出席して頂き、教授が英訳した謡曲について踏み込んだ討論も行われた。外国語の苦手な日本文学科の院生には負担になるかと心配したが、まったくの杞憂で、こうした贅沢な環境下、彼らも作品理解についての新しい視点を手に入れつつある。

シンポジウムでは面や衣装、身体論など、外国人による研究が盛んな分野にも触れる予定だが、そうした分野に関連する仕事の一つとして、ペルツィンスキ著『日本の仮面 能・狂言』の日本語訳を年度内に刊行する。現在は、訳文を全面的に見直し・改訂中である。難解なドイツ語で書かれているうえに、時代的制約から来る研究上の誤りのせいでさらに判りにくくなっている本文を、読みやすい現代日本語にするのは非常に困難ではあるが、過去において広く信じられていた説や、引用されている日本の原資料について多くの情報を持っている能楽研究所でこそ、行わなければならない作業と思われる。予定を2ヶ月以上遅れて7月中旬に出版された英訳版(Dover Publications)は、能面の写真(キャプション付き)に能楽概説風の数頁が添えられただけのものだった。訳者の前書きなどからは、英訳がうまく行かなかったのではないかと思われ、そうであればなおさら、現代の研究水準からのきちんとした注を付けた、日本語訳を出版することの意義は大きいだろう。

このほか、国際交流基金、早稲田大学演劇博物館と共同で「伝統芸能の海外公演に関する研究会－能楽部会」を組織し、早稲田・法政両大学の留学生、大学院生を含むメンバーによって、現代における能の海外公演の意義や役割についての調査・研究を進めている。また、幕末に作成された画帖『献英楼画叢』内の能楽関係資料に関する調査も進行中である。今年度は新たに、東京国立博物館所蔵のものを撮影・調査した。

タスクフォース④ 国際沖縄学の構築

安江 孝司

2005年度は、以下の三つの課題にしたがって、これまでの活動を継続させる。

①「メタサイエンス」としての沖縄研究

すでに、2004年度の活動報告において述べたように、沖縄サイドの研究者がヤマトの研究者の研究成果をどのように評価し、その評価に際しての基準は何かを明らかにする検討を継続して行う。この点を明らかにできるならば、外国人による日本研究の視点、それに対する日本人研究者の評価のあり方を知る手がかりになると見える。沖縄文化研究の場合、沖縄を一個の独自の文化とみる視点と沖縄とヤマトを含む「日本文化」を全体として捉える視点のズレが、沖縄・ヤマト双方の研究成果の違い、あるいは評価のズレとして存在している。これは、外国人の沖縄文化研究にも言えることであり、また沖縄、アイヌを含む「日本文化」を全体として捉える研究者の間にも、沖縄とヤマトと同一の文化構造を持つとする立場と、沖縄はアイヌと同じようにヤマトとはまったく異なる文化構造を持つと主張する立場にわけることができる。この違いが何によるか検討することを、解決すべき重要な課題としたい。

②基層文化レベルにおける「日本の中の異文化」研究

この研究は、日本学術振興会の科学研究費の助成によって開始され、すでに5年目を迎える。本年度は、台湾、中国の諸文化との比較を通して、琉球・沖縄文化の基層を形成し、かつヤマト文化との間に大きな断層を形成させている文化的側面の研究を展開している。そのための現地調査を8~9月中に実施する予定である。

③沖縄の文化的アイデンティティに関する研究

2004年度の活動報告には記述していないが、この課題は、2004年度から開始され、本年度で二年目を迎える。これもまた、科学研究費の助成によるものである。本タスクフォースでは、沖縄の文化的アイデンティティの問題を、従来、あまり重視してきたとは考えられない、文字を持たなかった時代の「歴史」を琉球王国はどのように語るか、という点に焦点を絞りながら研究を展開している。語り継がれる歴史のなかに、琉球・沖縄の人々のアイデンティティが色濃く反映していると考えられるからである。この問題を検討するうえで、近代にいたるまで文字を持つことのなかったアイヌ社会の口承文芸で語られる「歴史」との比較は欠かせないものと考えている。たとえば、両者を比較する限り、語りの歴史のなかでは「敗北の歴史」は語られることはなく、そのメカニズムを明らかにすることなどが本年度の課題である。

●学術フロンティア

テーマプロジェクト①

外国の日本学研究事情

相良 匡俊

学術フロンティア①の任務は西ヨーロッパ諸国における日本学研究に関する情報収集と関係機関との連絡です。しかしながら西ヨーロッパには日本学研究に関して長い伝統をもつ国が多く、イギリス、ドイツなどでは多数の大学で層の厚い研究が行われています。

現在のところ、私たちのチームが情報収集と連絡の双方において、ある程度恒常的な活動を行っているのはフランスに関してのみです。コレージュ・ド・フランスの日本学高等研究所の支援を頂いて、2004年度にはINALCO(国立東洋言語文化研究所)で源氏物語に関する小シンポジウムを実施することができました。また本年度は日本学高等研究所との共同主催による、かなり大がかりなシンポジウム「ヨーロッパから見た日本学・日本から見た日本学」(仮題)を12月にパリで実施する予定です。

情報収集に関しては、フランスにおける日本学研究の基本的な文献の整備が必要であり、現在のところ、予算の枠を気にしながら収集している段階です。逐次的に刊行されるものについては基本的なものがそろいつつあります。

一方、フランスにおける日本学研究の動向を観察することによって、フランス人研究者の眼差しの特徴を知り、その上で日本の社会と文化の特徴を考える作業をささやかながら継続しています。2005年度については日本の教育に関する研究の動向を調査しています。

テーマプロジェクト②

アジアの中の日本学

飯田 泰三

「日本」とは何か? を理論的に究明するための一方法として、「文化接触」論ないし“acculturation(文化移動による文化変容)”論を、「文化成層(stratification)」論ないし「古層」論と、組み合わせて考究する方法が考えられる。

日本文化の最底辺の層には、“人類学的古層”とも名づけうる、南太平洋の島々、アフリカ、中南米に通ずる、アニミズムやシャーマニズムと結びついた習俗・意識・文化が想定できる。その上に、狩猟・漁撈を生活の中心とした“縄文的古層”が、アイヌ、琉球、済州島、インドネシア等への拡がりを持つものとして、積み重なる。さらに、揚子江上流域から下流域、山東半島、朝鮮半島南部を経て渡来したと推定される、水田稻作農業を生活の中心とした“弥生的古層”が重なり、そこから、天皇制等「日本固有」とも目されるものをも含む“ヤマト的古層”が発展するのである。

こうして形成される日本文化の特質を解明するためには、考古学・文化人類学・社会人類学・民族学・民俗学・比較神話学・比較文学等々の視点を総合した調査・研究が必要である。以上の観点からわれわれは、この数年来、中国福建省に2回、済州島に2回、奄美諸島に1回、沖縄諸島に3回、台湾に3回、インドネシアに4回と、調査を積み重ねてきた(昨年度は、インドネシアのロンボク島、スンバワ島を8月に、スンバ島を12-1月に調査)。葬制(風葬等)、墳墓の形態、葬儀、寺院の形態、信仰形態(アニミズム等)、村落構造(半地下式等)、家屋構造(高床式等)、船の構造(筏舟等)、農具、漁具、シャーマニズム、織機、織布、民具、等々につき、共通のものを見出し、伝播経路とその stratification の様相を推定しようとしたのである。

従来の「アジアの中の日本」研究は、もっぱら中国——それも黄河文明の——との関係を中心とし、時に朝鮮との関係が入るという程度であった。それに対しわれわれは、海上ルートの南方からの要素をヨリ重視し、インド文化圏との関連に注目したい。同時に、黄河文明に先行する長江(水田稻作)文明が東アジア・太平洋に広がった位相を重視する。また、世界宗教たる佛教やヒンドゥー教(また儒教)が入る以前の、アニミズムやシャーマニズムを残すインドネシアの地域(形の上ではキリスト教圏)や台湾原住民族との比較を試みたい。

テーマプロジェクト③

古典文化と民衆文化

天野 紀代子

日本人にとって富士山とは何なのか。このチームは、一見通俗に見えて自明でないことが多いテーマ(富士山をめぐる日本人の心性)を掲げて、専門分野の異なるメンバーによる共同研究を行なってきた。時代によって異なる富士への眼差しを、先史遺跡の検証(金山喜昭)から、また古代、中世、近世に至る文芸(天野紀代子・山中玲子・横山泰子)や、江戸の民俗信仰(澤登寛聰)などによって跡づけてきた。

また、最近の「外国人による富士山研究」に目を広げ、外からの視点を導入することによって富士山研究を相対化する試みをしている。外国人による研究は、浮世絵版画に発したフジヤマへの憧憬などという素朴な段階を遙か過去のこととし、高度に専門化してきている。英語圏とフランス語圏の富士山研究の現状は昨年度に紹介・発表したが、その延長線上に2005年度には、コロンビア大学大学院博士課程のマルコ・ゴッダルド氏(宗教学)との交流が持たれている。6月30日には、澤登・ゴッダルドの両名で、三箇所の富士塚(音羽、駒込の富士神社、下谷坂本の小野照崎神社)で山開きの行事に立ち会った。こうした踏査は、国際的な研究の充実に益あるものと期待できる。

2005年度は、改めて若い研究者を巻き込んで研究会を組織し、具体的な研究課題を定めて検討を重ねていくことにし、その第一回目の会合が7月17日(土)に持たれた。参加者は14名で、法政の教員・大学院生が7名、他の大学や美術館・資料館などから7名であった。事務局(木村涼 法政大学大学院博士課程)を置き、今後月一回行なう研究会の発表担当者も決めて、今年度の活動をスタートさせている。まず9月24日(土)は「身禄派の富士講」と題した発表(澤登)であるが、今後、本草学や陰陽道、歌舞伎や江戸狂歌など、多方面からのアプローチによる富士山学を展開させる予定である。

テーマプロジェクト④

風土が作る文化

勝又 浩

われわれ「風土が作る文化」班では研究テーマを「屋敷囲いとしての民家の石垣研究」と焦点を搾って、地理学を柱とした研究を進めている。即ち、気象条件、生活形態、入手できる石材、技術の伝播経路等々の違いによってさまざまなバリエーションを持つ石垣文化を概観・概括して、先ずは東アジア的な特色を掴もうという計画である。

これまで南西諸島の喜界島、鹿児島県の知覧、出水、濟州島と、比叡坂本の調査を終えた。その結果、九州南部を境として石積みの様式に違いがあることが判明している。しかし、石材は、いずれの地点においても、極めて身近に産するものに限られている。

本年度は、屋敷囲いとしての石垣の分布の本州における北限を求めるることと、近隣の韓国、台湾との様式の検討を行なうこと目的として、以下の地域で調査することとする。1) 濟州島に至る中間の地域として対馬の屋敷囲いとしての石垣を調査、2) 南西諸島のうち、八重山諸島の石垣まで地域を広げる、3) 台湾の屋敷囲いとしての石垣が残っているかどうかを調べる、4) 濟州島での石垣の測量を行い、防風目的の屋敷囲いの海岸からの距離との関係を明らかにする。5) さらに本州域の台風による強風から石垣によって家を守ったと思われる四国の太平洋岸側を調査する。

1)は勝又、漆原が調査し、2)は琉球大学前門晃教授、3)は台湾教育大学陳國彥名誉教授、4)は漆原と濟州教育大学鄭光中教授、5)は漆原がそれぞれ調査を担当する。西南日本から韓半島南部台湾に至るまでの屋敷囲いとしての石垣の文化の地域的な差異性を明らかにしようとする計画である。

2006年度は、まとめの年に相当するので、本州の未調査地のデータを補充し、石垣文化と風土との関係を明らかにする目的である。

テーマプロジェクト⑤

日本の中の異文化

小口 雅史

学術フロンティア「日本学の総合的研究」では「外から見た日本文化」がメインテーマです。しかしじつはそもそもいわゆる「日本」の領域の中にも異文化があることを重視し、日本文化の多様性を解明することを目的としているのがこのテーマプロジェクトです。日本列島の中には多様な異文化が存在したのですが、とくに注目すべきは北と南のそれであり、今年度以降は北に重点を置いて研究を進めることにしています。

つまりアイヌ文化を中心に扱っていくわけですが、そのすべてを扱うことは不可能なので、時代としてはその成立前史(つまり古代「蝦夷」の時代)から近世末期まで、また内容としてはいわゆる日本文化との差異が際だっている「交易と交流」といった側面に重点を置いて研究に取り組んでいきます。

今年度はその第一弾として7月9日・10日に青森にて「本州アイヌの諸問題」というテーマで特別研究会を実施しました。これは文献・民俗・図像・考古といった諸分野から本州アイヌ文化の特質についてプロジェクトメンバーを中心に徹底的に討論を重ねることを目標にしたもので、北海道から離れたアイヌ文化こそ、まさに交易と交流を考えるのに最適な素材だと考えたからです。今後もこうした形で基本的にクローズドの研究会を重ねていきますが、その成果は来年度公開シンポで披露し、さらには『アイヌ文化の成立と変容』という形で公刊する予定です。ご期待下さい。

ワーキングプロジェクト

成果の情報化と活用

小口 雅史

このワーキングプロジェクトは、学術フロンティアを構成するさまざまなテーマプロジェクトの研究成果を、まずは学術フロンティア内で共有化し相互の研究の深化に役立ててもらうと同時に、さらには広く世界に向けて情報発信して、世界における日本学研究の進展に寄与しようとすることを目標としています。

これまでも様々なシンポジウムや、関連刊行物を電子化し、それをホームページ上で閲覧できるようにしてきましたが、今後は、引き続きそれらを進めるとともに、国際日本学研究所や学内で密接な協力関係にある他の研究所が収集してきた国際日本学関係の研究資源をも、より研究に利用しやすい形で共有化できるようネット上で公開していく予定です。

プロのデザイナーに依頼して作られる美しいユーザーインターフェースを用意することはできませんが、できるだけ使いやすいシステムを構築中です。画像類も積極的に公開していく予定ですが、それらの解説的なものも準備中です。また学術フロンティア内で作成されたさまざまなデータベースも公開できるようなシステムを併行して構築中です。年度内には公開できるよう作業をしておりますのでご期待下さい。

2005年度 国際日本学 研究者一覧

役職名	運営委員	氏 名	所属等
センター長・事務室長	○	堀江 拓充	法政大学国際日本学研究センター担当常務理事
所長	○	星野 勉	法政大学国際日本学研究センター副所長 国際日本学研究所所長 文学部教授
	○	王 敏	法政大学国際日本学研究センター教授
	○	飯田 泰三	法政大学法学部教授
	○	中野 実夫	法政大学文学部教授
	○	勝又 浩	法政大学文学部教授
	○	天野 紀代子	法政大学文学部教授
	○	澤登 寛聰	法政大学文学部教授
	○	漆原 和子	法政大学文学部教授
	○	小口 雅史	法政大学文学部教授
	○	間宮 厚司	法政大学文学部教授
	○	安孫子 信	法政大学文学部教授
	○	スティーヴン・ネルソン	法政大学文学部教授
	○	横山 泰子	法政大学工学部助教授
	○	相良 匡俊	法政大学社会学部教授
	○	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部助教授
	○	西野 春雄	野上記念法政大学能楽研究所所長 文学部教授
	○	山中 玲子	野上記念法政大学能楽研究所専任所員 同教授
	○	安江 孝司	法政大学沖縄文化研究所所長 法学部教授
	○	吉成 直樹	法政大学沖縄文化研究所専任所員 同教授
	○	青木 保	法政大学企画・戦略本部特任教授
	○	ヨーゼフ・クライナー	法政大学企画・戦略本部特任教授
		小川 健一	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		鈴木 貴樹	法政大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻
		叶 習民	法政大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻
		諫訪井 セタリン	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程日本文学専攻
		松下 奈津美	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程日本文学専攻
		若曾根 了太	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程日本史学専攻
		申 惠蘭	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程社会学専攻
		式町 真紀子	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		河合 修	法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程日本文学専攻
		林 寿美子	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程日本文学専攻
		海保 花野	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程社会学専攻
		鈴村 祐輔	法政大学大学院国際日本学インスティテュート博士後期課程政治学専攻

活動の足取り

- シンポジウム 『日中の文化関係を考える(その2) -文化摩擦(ずれ)から文化交流(相互理解)へ-』
2005.3.7 ポアソナード・タワー26F A会議室
- 2005年度若手研究者研究奨励金の採用 2005.5.27
- 公開研究会 『「異文化」としての日本 -国際日本学の可能性-』 青木 保氏 2005.6.1 ポアソナード・タワー25F B会議室
- 定例研究会 『日本文化研究の方法論をめぐる考察 -異文化間の対話の可能性をめぐって-』 星野 勉氏
2005.6.29 80年館7F会議室(中)
- 定例研究会 『日本思想史方法論とアジアの中の日本学』 飯田 泰三氏 2005.7.21 80年館7F会議室(丸)
- 公開研究会 『日本語の感情移入の表現スタイルについて』 徐一平氏 2005.9.20 ポアソナード・タワー25F B会議室
- 定例研究会 『「日本学」についての一考察 -九鬼周造にとっての日本とベルクソンにとってのフランスを比較してみる-』
安孫子 信氏 2005.9.28 80年館7F会議室(丸)

今後の活動計画

- 日中韓シンポジウム 2005.10.12 ポアソナード・タワー26F A会議室
- ワークショップ 2005.10.29 山折 哲雄氏
- 日独シンポジウム(ドイツ大使館後援) 2005.10.31 アルカディア市ヶ谷 伊吹の間
- 定例研究会『国際日本学』における日本の位置
桑山 敬己氏 2005.11.4 80年館7F会議室(丸)
- 日仏シンポジウム
2005.12.1~12.3 フランス パリ 日本文化会館

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
法政大学市ヶ谷キャンパス 第一校舎4階
TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884
E-mail:nihon@hosei.ac.jp
URL:<http://www.hosei.ac.jp/21coe/nihon/>

